



イギリス科ニュースレター No. 11 / October 2005

東京大学教養学部地域文化研究学科イギリス分科
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 (8号館317号室)
Tel/Fax 03-5454-6304 (イギリス科研究室直通)
E-Mail: british@ask.c.u-tokyo.ac.jp
Home Page: <http://British-Section.c.u-tokyo.ac.jp>



主任挨拶

中尾まさみ

いつになく雨の多い10月となりました。ひんやりとした空気の中、銀杏並木を歩けば、'Season of mists and mellow fruitfulness...'などと口ずさみたくもなるというものです。

今年度は、同窓生の皆様にキャンパスを訪れていただく機会が多い年になりました。去る6月19日夕刻にキャンパス内の新しいレストラン、ルヴェソソヴェールで開催されたイギリス科同窓会は、60名以上の方々にお集まりいただき、たいへん賑やかなよい会になりました。お忙しい中、ご参集下さいました皆様に、心より御礼申し上げます。同窓会は、5年に一度の開催を目指しております。今回おいで頂けなかった方々にも、次回是非お目にかかりたいと思えます。

また、10月14日には、50年前にイギリス科初代の外国人教師として教鞭を執られた Anthony Thwaite 先生が来日され、現在同職を務められる Richard Beard 先生と 'Visiting Writers at Todai 1955-2005: Fifty Years of Literary Inspiration' と題した対談をされました。詩人である Thwaite 先生と小説家である Beard 先生が、文学者として教師として、駒場での日々をどう感じられた(ている)か、ユーモアを交えたたいへん興味深いお話を伺うことができました。当日は50年前の学生から現役の学生まで、幅広い聴衆が一堂に会する貴重な機会となったほか、以前外国人教師を務められた Graham Law 先生や Andrew Fitzsimons 先生も駆けつけてくださり、こちらも大いに盛り上がりました。

そして、11月19日には、ホームカミングデイが行われます。イ

ギリス科研究室も昨年同様、午後4時から5時半まで開放いたします(詳細は裏面)。どうぞ皆様、懐かしい駒場へお運び下さい。

新任のご挨拶

西川杉子

今年度からイギリス科に着任した西川杉子です。専門は近世イングランド・近世ヨーロッパ史です。9月末まで神戸大学文学部との併任をつとめておりましたので、ようやく駒場での本番が始まったというところですが、駒場のキャンパスは広くてまだ迷うこともしばしばです。

私は立教大学文学部史学科で学び、そのまま立教の大学院に進学いたしました。当時の立教・西洋史は大学院生の数がたいへん少なく、ゼミは指導教員の松浦高嶺先生とほとんど一対一、西洋史全体の共同演習では、先輩たちが論文作成のために籠ってしまうと教員4名に学生は私だけということもあったほどです。いまから振り返ると恵まれた環境だったのですが(不勉強な私には大変怖かったです)、その半面ほとんど井の中の蛙状態でした。松浦先生が退職されると、後任の青木康先生の指導を受けると共に、同じ時期に本郷に転任されてこられた近藤和彦先生のゼミにも出席させていただくようになったのですが、東大の学生たちの対象とするテーマ・時代の多様なことにたいへん驚いたことを覚えております。

修士論文では、マイクロフィルムで入手した亡命ユグノー・ジャーナリストの手による新聞記事を通して、18世紀初頭のイングランド政治社会を論じたものをまとめました。その後博士過程に進学し、キャンノン奨学金を得たのがきっかけとなって、92年秋からロンドン大学ユニヴァーシティ・コレッ

ジ(UCL)の博士課程に留学することになりました。このコレッジにはイギリスのユグノー研究の中心的な組織「イギリス・アイルランド・ユグノー協会」の図書館があることを知っていたので、それを利用して、修論のテーマを一歩進める形で17世紀末イングランド名誉革命に亡命ユグノーが及ぼした影響について調査しようと考えていたのです。指導は17世紀教会史が専門の Nicholas Tyacke 先生が引き受けてくださいました。当たり前のことですが、それまで日本で、主に二次文献を読むことで構想していた論文のテーマがそのままイギリスで通用するはずもなく、すぐにオリジナリティとはなにかという問題に突き当たり、史料のなかから議論を組み立ててゆく必要性を痛感するようになりました。この頃は、Tyacke 先生に中間報告を行なうと、ほぼ数行ごとに evidence は、evidence は、という先生の質問を受けました。それから半ば、開き直って、イングランドの高位聖職者や政治家に宛てたヨーロッパ大陸諸国からの書簡や、迫害されたユグノーやその他のプロテスタントのための義捐金募集の記録をひたすら読み、書き写すこと2年余り。史料から史料へ、なかば芋ずる式に史料を求めて、ロンドンから、オックスフォード、グロスターやスタッフォード、エディンバラへ、さらにアムステルダム、ハーグ、そしてイタリアのアルプス地帯へと調査範囲を広げているうちに、「啓蒙の世紀」といわれた18世紀においてもなお、宗派的なネットワークが汎ヨーロッパ規模で広がっていたことに気がつくようになりました。結局、計6年かかって 'English Attitudes toward Continental Protestants with Particular Reference to Church Briefs c. 1680 - 1740' という

題目で博論を書き上げましたが、プロテスタント・ネットワークの研究はまだ続行中です。論文を提出した翌日、続けてプロテスタント・ネットワークの調査するためにリトアニアへ向かった時の高揚感は忘れることが出来ません。

帰国してから1年後、神戸大学文学部史学科（現在は人文学科西洋史専修）に就職して、5年間過ごしました。六甲山の中腹にあるキャンパスから見下ろすと、海が広がっているのがなんとも気持ちのよいところでした。私は生まれも育ちも東京なので、関西に住むこと自体がひとつの冒険でもありました。これからは駒場という新しい場で、自分の世界を広げ、同時に学生諸君と知識を共有し、議論をしていくことを望んでいます。よろしくお願いたします。

イギリス科教員の語るイギリス
シリーズ第3回

トラファルガー遠望

山本史郎

今年2005年は、イギリスの英雄ホレイシオ・ネルソンがトラファルガー海戦で戦死してから、ちょうど二百年目にあたる。

1805年10月21日、イギリス海軍の27隻の戦艦が、ジブラルタル海峡に近いスペイン沿岸のトラファルガー岬沖でフランス・スペインの33隻からなる連合艦隊と激突した。午前11時過ぎ、ようやく敵を把握しつつあったネルソンは、「英国八各員己ガ義務ヲ果タサンコトヲ期待ス」という有名な激励信号を発した。そして約2時間後の1時15分ごろ、フランス戦艦ルドゥターブルの狙撃兵の放った鉛の銃弾がネルソンの胸の動脈を切断し、脊椎をうち砕いた。ネルソンはこのあと苦悶のなか4時半まで生き延び、自軍の損失はゼロ、捕獲もしくは撃沈した敵艦18隻という一方的な大勝利の報告を受けて、「神様のおかげで義務を果たすことができました」と呟きながらことごとく。

劇的といえば劇的 — 現実の小説より云々と俗に言うが、劇作家がこのような筋書きのドラマを

創作したとすれば、あまりに臭く見ていられないのではないだろうか。しかし、ネルソンという人物の面白いところは、神を本心から敬い、国家に対しても神秘的な感覚すら抱いていたばかりか、英雄としての自分の運命を信じていたらしいことである。したがって、「本懐をとげた」という表現は、ネルソンについて述べた場合には百パーセント文字通りで、ネルソンへの皮肉も、そう述べる人自身への慰めも混じらない。神はまさに当たり役の俳優を、自らの書いた壮大な物語の主人公に配したのである。

このネルソンの勝利を追想して、百年前の1905年に世界各地で祝賀が催された。ロンドンのトラファルガー広場では大規模な記念祝典があった。日本でさえ、東郷大将の写真と並んで、ネルソン提督の肖像が新聞に掲載されたとのことだ。ちなみに同じ年の5月27日には、東郷平八郎ひきいる連合艦隊が、ロシアのバルチック艦隊を相手に対馬沖で戦いをいどみ、ネルソンに劣らぬ完璧な勝利をあげた。当時は日英同盟の時代で、しかも日本海軍がイギリス海軍をモデルにして作られていたことなどを考えると、ネルソンと東郷の肖像を並べたというところに、明治日本の自信、自慢、気負いなどが感じられて、むしろほほえましい気がする。

さらにその百年後、つまり今年のことだが、さる6月29日にポーツマス沖の海上で記念の行事が行なわれた。エリザベス女王をはじめイギリスの王族が参加した海軍の観艦式に引き続き、本物の帆船によるトラファルガル海戦の再現が行なわれた。さすがにEUでヨーロッパの融和をめざしている時代なので、イギリス対フランスというかたちではなく、青組と紅組の決戦という形式だったようだが、5か国から参加した都合17隻の記念的な帆船が実際に大砲を放ちながら、トラファルガル海戦の実際のありさまを再現したばかりか、ネルソンに扮した俳優が戦艦ヴィクトリーに乗り込む場面か

らはじまり、死の場面までを演じた。そのあとはお決まりの花火の打ち上げだが、なんと「アテネオリンピックで用いられた総量よりも多かった」とのことである。

ネルソンが戦死したときに乗っていた戦艦ヴィクトリーは、そのまま保存されて、現在でもポーツマスの乾ドックに係留されている。艦内を見ることはできるが、かならず案内付きの見学である。イギリスにとって超重要の国宝だから、本音を言えば、半分以上は案内というよりは監視なのだろう。ヴィクトリーは「戦艦」とはいつても、1765年に進水した木造帆船である。戦闘でこうむった損傷はもちろんのこと、長いこと水に浮かんでいたので腐食が進んだ。次々と補修が行なわれた結果、現在のヴィクトリーでオリジナルの木材が占める割合は2~30パーセントだろうという。新陳代謝を行ないながらも、トラファルガーの最後の生存者がここに生きている。

ホームカミングデイのお知らせ

きたる11月19日土曜日、本郷・駒場両キャンパスにおいて、大学全体の同窓会であるホームカミングデイが開催されます。8号館3階317号室イギリス科研究室では、当日、午後4時から5時半までの間、お飲み物などご用意の上、皆様のおいでをお待ちしております。

会の詳細はお手元に届いていることと存じますが、ご不明の点は下記ウェブサイトからご確認ください。

<http://www.c.u-tokyo.ac.jp/jpn/kyoyo/komed20051119.html>



●イギリス科からのお願い●

ご住所等の変更ございましたら、ご連絡下さいますようお願い申し上げます。